

松山市駅前広場整備

—「歩いて暮らせるまち松山」の交流広場—

むら い のぞむ
村井 望

松山市 都市整備部 交通拠点整備課

1 松山城を中心に発展した城下町

松山市は、明治22年に愛媛県初の市制を施行し、その中心市街地は「賤ヶ岳の七本槍」の一人とされる戦国武将、加藤嘉明が築城した松山城を中心に発展した城下町で、日本最古の名湯といわれる道後温泉や、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』の主人公である正岡子規や秋山好古、真之兄弟ゆかりの史跡など、数多くの観光資源がまちなかに点在し、多くの観光客で賑わう「いで湯と城と文学

のまち」である。

2 松山市の「歩いて暮らせるまちづくり」

松山市では、人口減少・少子高齢化が進む中、ライフスタイルに応じて市民の誰もが質の高い生活ができるコンパクトシティを目指している。郊外駅周辺では、既存店舗などの都市機能を活かし、過度に車に頼らなくても円滑に移動できるよう、公共交通のサービス水準を高め、中心市街地では、松山城や道後温泉などの地域資源に加え、市民生活や観光の足となる市内電車(路面電車)があるほか、商業や医療などの都市機能も集約しているため、歩行者や自転車といった「遅い交通」に配慮した「歩いて暮らせるまちづくり」を進めている。

城山公園から花園町通り、松山市駅、フルモールの銀天街や大街道を経由し、道後温泉に至る全長約4kmのルートを「歩いて暮らせるまちづくり」のネットワーク(図1)とし、ロープウェー街



写真1 松山城



写真2 道後温泉本館

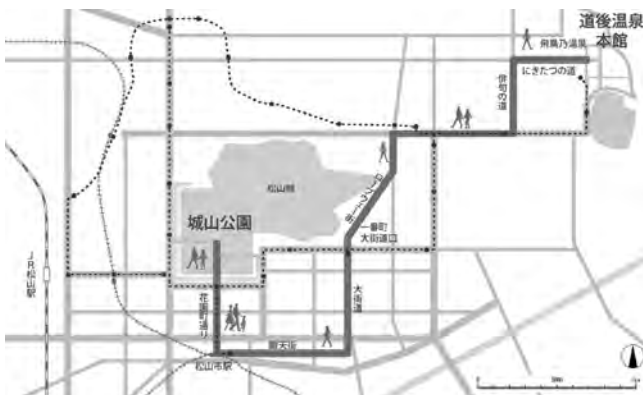


図1 「歩いて暮らせるまちづくり」のネットワーク

や道後温泉周辺地区(写真3)、花園町通り(写真4)などで、それぞれの地区や路線の特性に応じた街路空間の再構築を実施している。具体的には歩道のバリアフリー化による安全で安心な歩行環境の整備、街歩きを促す歩いて楽しくなる景観の形成、街路空間と一体となって賑わいをもたらす沿道店舗のファサード整備などを行っている。ここからは、「歩いて暮らせるまちづくり」の重要な拠点となる松山市駅前前で実施している広場整備について紹介する。



写真3 道後温泉本館前

3 松山市駅前広場の現状と課題

伊予鉄道松山市駅は、市内電車や郊外電車、路線バスが乗り入れ、市の中心部と郊外を結び、市内最大の交通結節点で、1日約3万人の乗降客が行き交う駅である。しかし、市駅前ロータリーは、自動車の通過交通の流入による歩行者動線の分断や交通渋滞、路線バスとタクシー及び一般車の輻輳、放置自転車や自転車交通による危険な走行環境、広場空間の不足などの課題を抱えている(図2、写真5・6)。



写真4 花園町通り

そのような課題を解決するため、市内電車の電停やバスロータリー等の再配置により、乗り継ぎ

の利便性を向上させ、一般車の自動車交通を完全に排除し、これによって生み出される空間を交流

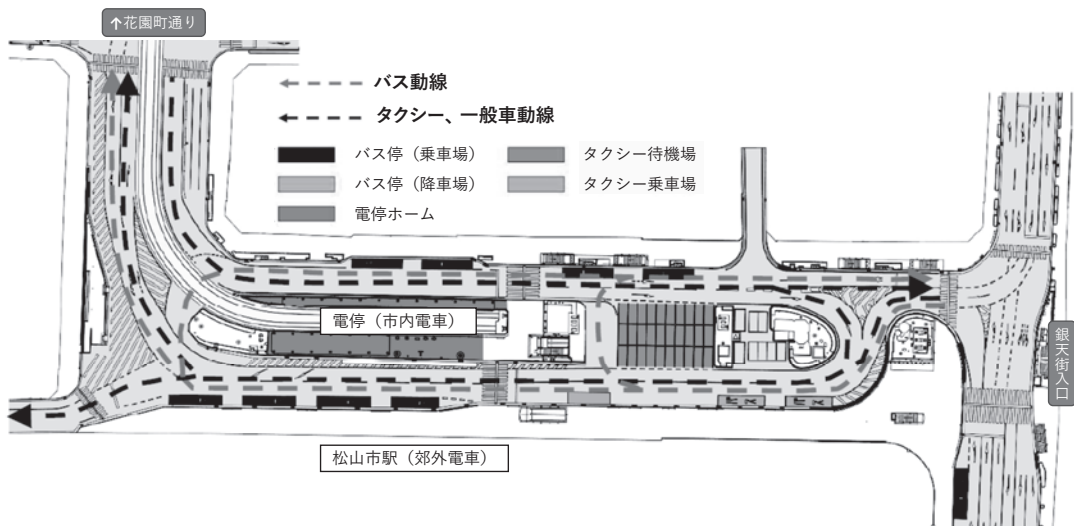


図2 整備前の松山市駅前広場



写真5 路線バスとタクシー・一般車の輻輳



写真6 車道による歩行者動線の分断

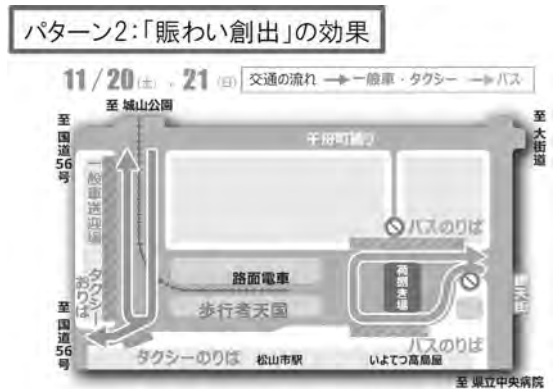


図3 社会実験の概要



写真7 社会実験の様子

広場として整備する構想を平成30年9月に公表した。

4 社会実験の実施

本整備事業は、自動車や歩行者の交通の流れが大きく変化するため、整備後の状況を実空間で再現することで、交通への影響や賑わい創出の効果などを分析・評価し、今後の整備に反映することを目的に、令和3年11月に14日間の社会実験を実施した(図3、写真7)。交通の影響に関する検証では、滞留長が実験前と比較して若干伸びたものの、大きな渋滞は見られなかった。また、賑わい創出の検証では実験前と比べて歩行者数が約1.7倍に増加し、多くの人々がイベントに訪れた。

5 松山市駅前広場整備

社会実験の結果や関係者との協議を踏まえ、令

和4年3月に整備計画を公表した。“人々の往来と賑わいを「つなぐ」松山の交通・交流拠点”を整備コンセプトに、市内電車の電停を郊外電車の駅に近接させ、バスロータリーやタクシー・一般車用ロータリーを再編するとともに、各乗降場を屋根でつなぎ、バリアフリー化を図ることにより、公共交通の乗り継ぎ利便性の向上を図ることになっている。また、新たに交流広場の整備を行い、銀天街と花園町通りをつなぐ回遊動線を生み出し、市民の憩いや賑わいの空間を創出することになっている(図4～6)。

令和6年2月からロータリー整備などの本格的な工事をスタートし、令和6年秋頃から市内電車の軌道や電停の移設工事、令和7年度には、交流広場等の整備を行い、令和8年秋の完成を目指している。

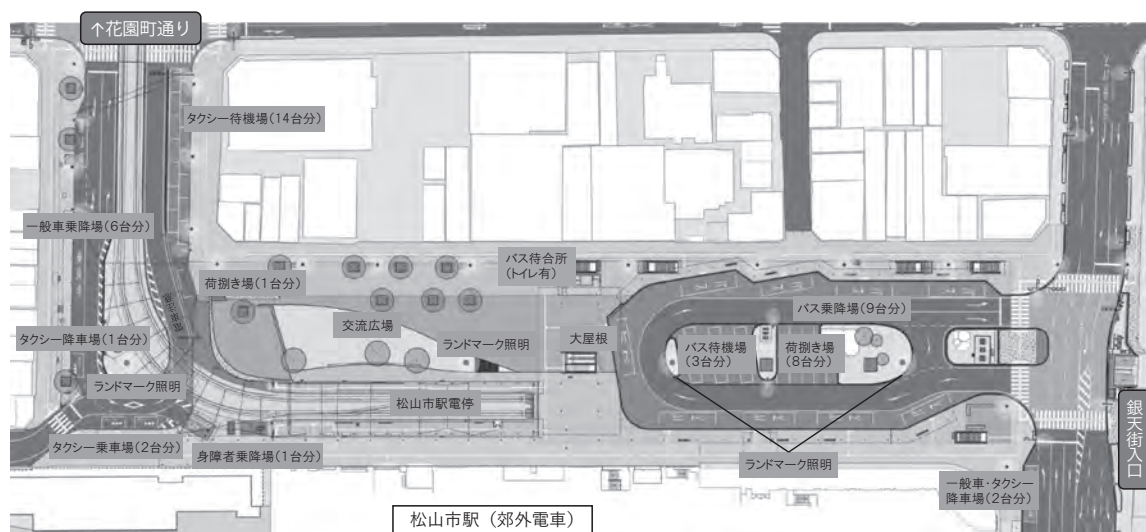


図 4 整備後の松山市駅前広場



図 5 西側からの全景



図 6 東側からの全景



写真 8 沿道商店街の景観まちづくり

6 沿道商店街の景観まちづくり

沿道商店街では、広場の整備と一体的な魅力ある街並みを形成するため、老朽化したアーケードを撤去し、景観まちづくりデザインガイドラインを策定し、ファサード整備を行っており、官民が連携して「歩いて暮らせるまちづくり」の実現を目指している(写真8)。

7 おわりに

今後、JR 松山駅周辺でも連続立体交差事業や区画整理事業、街路事業などを行い、土地利用の増進や交通環境の改善のほか、四国の陸の玄関口として賑わいと交流を生む駅まち空間の形成を図り、歩いて暮らせるまちづくりを推進していく予定である。